

自我漏洩感に関する研究（２）改訂版

○坂本佳織・宮本正一

（岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部）

Key Words：自我漏洩感 共感性

<問題と目的>

対人恐怖症と統合失調症には共通して、赤面恐怖、自己視線恐怖、自己臭恐怖、独語妄想、寝言妄想、妄想伝播など、自己から他者へ「漏れ出てゆく」と感じる症状がある。これが自我漏洩症状（eggrhera symptoms）である（藤縄，1972）。自我漏洩症状は、自己から他者に漏れ出るものが、傍らにいる他者に不快感を与えると感じ（加害感）、その結果、他者にさげすまれ忌避されると感じる（忌避感）という特徴をもっている。佐々木（2003）は健常者がもつ、自我漏洩症状と結びつくような体験をも対象とするために、「何も言わないのに自分の内面的な情報が伝わると感じ、ネガティブな結果が予測される体験」を「自我漏洩感」と定義し研究している。本研究では、上記、佐々木（2003）の定義を採用し、「自我漏洩感」という事とする。

本研究の目的は、昨年度の発表では不十分であった、「自我漏洩感状況尺度」（佐々木，2004）の得点の違いが、多次元共感測定尺度（Daivis，1983）の得点、発達段階（中学生・高校生・大学生）、性別、とどのような関連を持つのか、さらに詳しく検討することである。そのため、本研究では、階層型クラスター分析（Ward法）を用い、特徴を明らかにすることとした。

<方法>

大学生193名（男100名，女93名）、高校生250名（男158名，女92名）、中学生188名（男80名，女108名）の合計631名（男338，女293名）に対し質問紙を実施した。使用した尺度は、以下の2つ、あわせて53項目であった。

- ① 自我漏洩感状況尺度（佐々木，2004）の短縮版。（「苦手な相手」「赤面・動揺」「不潔」「お見通し」「賞賛」の5つの下位尺度からなる。短縮版は25項目。体験頻度と苦痛度についてそれぞれ5件法で回答を求める。）
- ② 多次元共感測定尺度（Daivis，1983）を桜井（1988）が日本語訳したもの。（認知的側面として「視点取得」、情動的側面として「想像性」「共感的配慮」「個人的苦痛」、計4つの下位尺度からなる。28項目。5件法で回答を求める。）

<結果と考察>

「自我漏洩感状況尺度」（佐々木，2004）の下位尺度5つごとの合計得点から、階層型クラスター分析（Ward法）を行った。その結果、大きく3つの群に分けられた（以下、クラスターⅠ～Ⅲとする）。各クラスターの特徴は以下の通りである。

○ 性別・発達段階に関して（人数）

表1 性別に関して

	男	女	合計
クラスターⅠ	152 ▲	104 ▽	256
クラスターⅡ	74	72	146
クラスターⅢ	112	117	229
合計	338	293	631

($\chi^2=5.958$.05<p<.10)

表2 発達段階に関して

	中学生	高校生	大学生	合計
クラスターⅠ	122 ▲	81 ▽	53 ▽	256
クラスターⅡ	29 ▽	61	57 ▲	147
クラスターⅢ	43 ▽	111 ▲	78	232
合計	194	253	188	635

($\chi^2=61.562$ p<.01)

○ 「自我漏洩感状況尺度」に関して

総合計と、全ての下位尺度（「苦手な相手」「赤面・動揺」「不潔」「お見通し」「賞賛」）において、得点が、クラスターⅠ<クラスターⅢ<クラスターⅡになるという有意な差が認められた。

○ 「多次元共感測定尺度」に関して

総合計と、「個人的苦痛」「想像性」「共感的配慮」の3つの下位尺度（情動的側面）において、得点が、クラスターⅠ<クラスターⅢ<クラスターⅡになるという有意な差が認められた。しかし、「視点取得」（認知的側面）では、クラスターⅡとクラスターⅢの間には有意な差がなく、クラスターⅠ<クラスターⅡ・クラスターⅢになるという有意な差のみが認められた。

以上の結果をまとめ、各クラスターの特徴を考えると、クラスターⅠは、自我漏洩感、共感性ともに低い群であるといえる。クラスターⅡは、その逆であり、自我漏洩感、共感性ともに高い群である。クラスターⅢは、Ⅰ、Ⅱの中間に位置する群である。発達段階に着目すると、クラスターⅠには中学生が多く、クラスターⅢには高校生・大学生が多かった。また、クラスターⅡに属する人は少なかった。

また、発達段階（中・高・大）を独立変数とし、自我漏洩感、共感性を従属変数とする一要因の分散分析の結果より、自我漏洩感が中学生<高校生<大学生となること、共感性が、中学生<高校生<大学生となる事とあわせて考えると、クラスターⅢは健康的な群であり、クラスターⅡは自我漏洩感が高くなりすぎた、病理群なのではないかも考えられる。とすると、病理群（クラスターⅡ）でも、健康的な群（クラスターⅢ）と同程度、むしろそれ以上の共感性を持ち合わせているという事がいえるだろう。

また、共感性の下位尺度「視点取得」では、クラスターⅡとクラスターⅢの間で有意な差が認められていない。これは、病理群（クラスターⅡ）でも、健康的な群（クラスターⅢ）でも、共感性の認知的側面、つまり、「視点取得」に関して差はないという事である。病理群（クラスターⅡ）と、健康的な群（クラスターⅢ）の差は、共感性の情動的側面によるものが大きいのかかもしれない。

(SAKAMOTO, Kaori; MIYAMOTO, Masakazu)

自我漏洩感 に関する研究(2)

○ 坂本佳織 宮本 正一教授
(岐阜大学 教育学研究科) (岐阜大学 教育学部)

①自分から何かが漏れていき

→ 7割近い大学生が感じている！

健全者にもよくみられる
経験に根ざしている。

自我漏洩症状とは

- ・ 自我漏洩症状(egorrhea symptoms)
- ・ 人の目を過剰に意識してしまう病理
- ・ 対人恐怖症、統合失調症に共通してみられる症状
- ・ 自分の中の何ものかが、
自分から 漏れる

本研究における 「自我漏洩感」の定義



「何も言わないのに自分の内面的な情報が伝わると感じ、ネガティブな結果が予測される体験」

- ①自分から何かが漏れていき
- ②それによって他者を不快にし
加害感
- ③その結果、他者に嫌われてしまう
忌避感



共感性(empathy)とは

- ・ 「他者の心理状態を正確に判断する認知能力」＝認知的側面
- ・ 「他者の心理状態に対する代理的な情動反応」＝情動的側面

共感性と自我漏洩感

- ・他者の立場に立って物事を考える

「視点取得特性」

- しかし、
- 一方は、適応的に働き(共感性)
 - 一方は、不適応的に働く(自我漏洩感)

7

・調査時期

平成16年9月下旬から11月中旬

・調査方法

個別記入方式の質問紙調査を無記名で実施。中学校教諭、高校教諭に実施を委託。

10

本研究の目的

- ・発達段階による違い
- ・共感性との関わり

階層型クラスター分析(Ward法)

を用いて、詳しく分析していく

8

調査内容①

自我漏洩感状況尺度(佐々木, 2004)の短縮版

- ・「苦手な相手」「赤面・動揺」「不潔」「お見通し」「賞賛」の5つの下位尺度
- ・短縮版は25項目
- ・体験頻度と苦痛度についてそれぞれ5件法で回答を求める。

11

方法

・調査対象者

大学生 193名(男100名, 女93名)

高校生 250名(男158名, 女92名)

中学生 188名(男80名, 女108名)

合計 631名(男338, 女293名)

9

自我漏洩感状況尺度

1. 苦手な相手

1. 苦手な相手と接する機会が多い。その人との接し方について悩んでいる。苦手な相手と接する機会が少ない。その人との接し方について悩んでいる。

2. 赤面・動揺

1. 赤面・動揺しやすい。赤面・動揺する機会が多い。赤面・動揺する機会が少ない。赤面・動揺する機会が多い。

3. 不潔

1. 不潔な人を見ることが多い。不潔な人を見ることが少ない。不潔な人を見ることが多い。不潔な人を見ることが少ない。

4. お見通し

1. お見通しされることが多い。お見通しされることが少ない。お見通しされることが多い。お見通しされることが少ない。

5. 賞賛

1. 賞賛されることが多い。賞賛されることが少ない。賞賛されることが多い。賞賛されることが少ない。

調査内容②
多次元共感測定尺度(Daivis, 1983)を桜井(1983)が
日本語訳したもの

- 「視点取得」(＝認知的側面)
「共感的配慮」「個人的苦痛」「想像性」
(＝情動的側面)
の4つの下位尺度
- 28項目
- 5件法で回答を求める

「自我漏洩感状況尺度」の
(体験頻度×苦痛度)得点を
各下位尺度ごとで合計したものから、
階層型クラスター分析(Ward法)を行った

大きく **3** つの群に分けられた

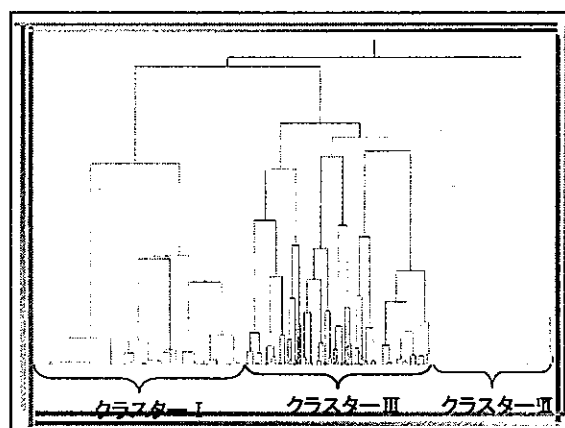
多次元共感測定尺度

視点取得

共感的配慮

個人的苦痛

想像性



結果と考察

性別(人数)

	男	女	合計
クラスターⅠ	152▲ (137.1)	104▽ (118.9)	256
クラスターⅡ	74 (78.2)	72 (67.8)	146
クラスターⅢ	112 (122.7)	117 (106.3)	229
合計	338	293	631

$$(\chi^2=5.958 \ .05 < p < .10)$$

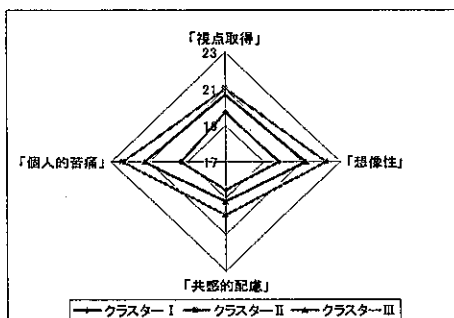
発達段階(人数)

	中学生	高校生	大学生	合計
クラスターⅠ	122▲ (78.2)	81▽ (102)	53▽ (75.8)	256
クラスターⅡ	29▽ (44.9)	61 (41.5)	57▲ (43.5)	147
クラスターⅢ	43▽ (70.9)	111▲ (92.4)	78 (68.7)	232
合計	194	253	188	635

$$(\chi^2=61.562 \quad p<.01)$$

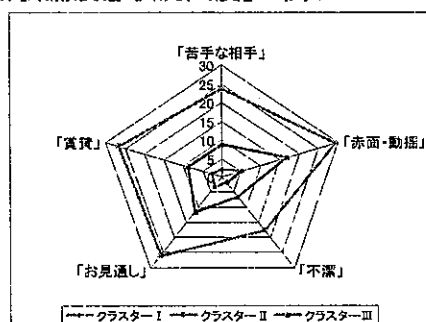
19

「多次元共感測定尺度」に関して



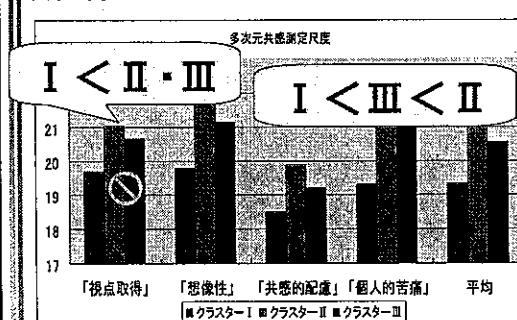
23

「自我漏洩感状況尺度」に関して



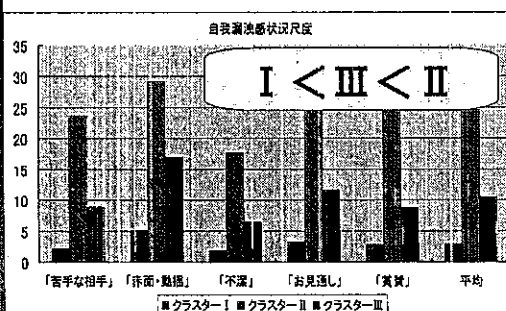
20

合計得点



24

体験頻度×苦痛度の合計得点



25

まとめ

- ・ クラスターⅠ
中学生が多い
自我漏洩感・共感性ともに低い
- ・ クラスターⅡ
属している人が少ない
自我漏洩感・共感性ともに高い
- ・ クラスターⅢ
高校生・大学生が多い
中間に位置している

26

発達段階(中・高・大)＝独立変数
 自我漏洩感、共感性＝従属変数
 一要因の分散分析

→ 自我漏洩感
 中学生<高校生<大学生
 共感性
 中学生<高校生<大学生

27

ご静聴
 ありがとうございました。



30

→ クラスターⅢ ＝ 健康的な群？
 クラスターⅡ ＝ 病理群？

→ 病理群(クラスターⅡ)でも、
 健康的な群(クラスターⅢ)と
 同程度、むしろそれ以上の
 共感性を持ち合わせている

28

共感性「視点取得」に注目

→ 病理群(クラスターⅡ)と、健康的
 な群(クラスターⅢ)の間に差は
 なかった。

認知面での差はない

29